



逗子の歌

東久世通禰

かりたちて梅の花かひ櫻貝

拾はん春になりけるかな

里井柳枝子

旅やかたいでいる人の影たえて

田こえの浦は秋ふけにけり

浅井鐵子

汐あみし人も歸りてなみ松の

葉山の磯に秋風ぞふく

板倉止子

月かけは葉山の浦にたゝよひて

見るめ涼しくよする白波

設在御幸子

白波にうつらふ春のわけぼのを

いかに見るらんうらのあま

關屋愛子

筆とりて書にもかゝはやいひしらぬ

田越の浦の月の夕べを

佐々木春尾子

沖とはくよる行く船の數みえて

葉山の浦は月さやかなり

大河内桂子

白波の清き濱邊をさまよへば

みそらにかすむ不二の神山

松永そよ子

月さよし波の音涼し思ふとち

田越の浦の浦つたひせん

西升子

春かすみふかき葉山の木の間より

見ゆるはかけや何地ゆるらん

板倉藤子

波白き葉山の浦の松かけは

千年ふむともあかしとぞ思ふ

奥村さし子

よせ返す波のしらへも音すみて

葉山の浦は月さやかなり

横山 碩

あつけさをさけてのみとふ人々に

田越の浦の春を見せはや

加藤 雛子

こえくれば松の木かけに海みえて

白波かすむ返子のうらく

相澤 求

立ち并ぶ松の葉山の浦風に

はてうちて行くあまのつり船

大竹伊勢子

よる波の間なくひまなく音さやく

葉山の浦は夏としもなし

同上

立ちこむる霞の庭ものとかにて

葉山の浦は月になり行く
佐藤朝恵子

高殿の玉琴のしらべ音たえて

葉山の沖に秋風をふく

井原 豊作

おなしくはかゝるさかひに住みてまし

松青きところ波きよきところ

おとづれ

つねを

むしの歌聲

さゝながら

庭によりたる

まる窓に

問はず語りの

あきの夜は

ひとりこゝろを

もみぢ葉の